

わたしたちの暮らしと住まいを見つめ直す展覧会

リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s–1970s
LIVING Modernity: Experiments in the Exceptional and Everyday 1920s–1970s
2025. 9. 20 Sat. – 2026. 1. 4 Sun.

リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s–1970s

LIVING MODERNITY

EXPERIMENTS IN THE EXCEPTIONAL

AND EVERYDAY 1920s–1970s

ル・コルビュジエ | Le Corbusier

藤井厚二 | Koji Fujii

2025.9.20.SAT±–2026.1.4.SUN日

休館日 | 毎週月曜日 Closed | Mondays

ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ | Ludwig Mies van der Rohe

10月13日(月・祝)、11月3日(月・祝)、24日(月・振休)は開館、10月14日(火)、11月4日(火)、25日(火)、12月31日(水)、1月1日(木)は休館
Closed on October 14, November 4 and 25, December 31, January 1. Open on October 13, November 3 and 24

開館時間 | 10:00–18:00 ※入場は閉館の30分前まで
Opening hours | 10:00–18:00 *Last admission 30 minutes before closing

土浦亀城 | Kameki Tsuchiura

主催 | 兵庫県立美術館、日本経済新聞社 後援 | 一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本建築家協会
Organized by | The Hyogo Prefectural Museum of Art; Nikkei Inc. With the support of | Architectural Institute of Japan; The Japan Institute of Architects

リナ・ボ・バルディ | Lina Bo Bardi

協賛 | 公益財団法人伊藤文化財団 協力 | ミサワホーム株式会社、株式会社 竹中工務店、株式会社新建築社
With the sponsorship of | Ito Cultural Foundation With the cooperation of | MISAWA HOMES CO.,LTD. ; TAKENAKA CORPORATION; Shinkenchiku-sha Co.,Ltd.

特別協力 | 公益財団法人日本教育公務員弘済会 兵庫支部
With the special cooperation of | Hyogo Branch of Japan Educational Mutual Aid Association of Welfare Foundation

アルヴァ・アアルト | Alvar Aalto

菊竹清訓 | Kiyonori Kikutake

開催概要

1920年代以降、ル・コルビュジエやルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエといった多くの建築家が、時代とともに普及した新たな技術を用いて、機能的で快適な住まいを探究しました。その実験的なヴィジョンと革新的なアイデアは、やがて日常へと波及し、人びとの暮らしを大きく変えていきました。

「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」と題した本展覧会は、当代の暮らしを根本から問い直し、快適性や機能性、そして芸術性の向上を目指した建築家たちが設計した、戸建ての住宅をご紹介します。1920年代から70年代にかけて建てられたそれらのモダン・ハウスは、国際的に隆盛したモダニズム建築の造形に呼応しつつも、時代や地域、気候風土、社会とも密接につながり、家族の属性や住む人の個性をも色濃く反映しています。理想の生活を追い求めた建築家たちによる暮らしの革新は、それぞれの住宅に固有の文脈と切り離せない関係にあるのです。

一方、それらの住宅は、近代において浮上してきた普遍的な課題を解決するものでもありました。身体を清潔に保つための衛生設備、光や風を取り込む開放的なガラス窓、家事労働を軽減するキッチン、暮らしを彩る椅子や照明などの調度、そして住まいに取り込まれた豊かなランドスケープは、20世紀に入り、住宅建築のあり方を決定づける重要な要素となったのです。そして、こうした新しい住まいのイメージは、住宅展示や雑誌などを通じて視覚的に流布していきました。

本展覧会では、20世紀に始まった住宅をめぐる革新的な試みを、衛生、素材、窓、キッチン、調度、メディア、ランドスケープという、モダン・ハウスを特徴づける7つの観点から再考します。そして、特に力を入れてご紹介する傑作14邸を中心に、20世紀の住まいの実験を、写真や図面、スケッチ、模型、家具、テキスタイル、食器、雑誌やグラフィックなどを通じて多角的に検証します。

本展のみどころ

✓ 1920年代から70年代、モダン・ハウスの流れ

国立新美術館からの巡回となる本展では、当館の会場にあわせて、鍵となる14邸の住宅を年代順に沿って展示します。個々の住宅における特徴とともに、建築家たちが取り組んだ共通の課題や戦略を、住宅設計の転換期となった1920年代から70年代までの約半世紀の流れの中でご紹介します。

✓ 原寸大で体験する名作住宅の景色

安藤忠雄設計による当館のガラス張りの回廊を抜けた先、展示会場に入るとそこには安藤が敬愛する巨匠、ル・コルビュジエが設計した「ヴィラ・ル・ラク」の窓辺を再現した空間が広がります。実際の居住空間やスケールを体感できるこれら原寸大モックアップに加え、本展では当時の図面やドローイング、建物の写真や映像、新たに制作された模型などを通じて、世界中の名作住宅から見える豊かな景色を紹介します。

✓ あの名作家具から隠れた逸品まで

展示室を巡ると、街のお洒落なお店やオフィスで見かけたことがある家具に、ふと出会うかもしれません。建築家がそれぞれの住まいに合わせて趣向を凝らし、細部にまでこだわってデザインした椅子や机、照明や食器といった調度からは、今なお使い続けられている名作のルーツや、素材や機能に対する探求、暮らしの様々な場面向けられた建築家のまなざしを感じ取ることができます。

✓ 散りばめられた暮らしのアイデア

本展では住宅建築を再考するにあたって、個々の住まいにおける暮らしのあり方にも目を向けます。20世紀に革新的な試みとして始まり、今日の私たちの日常の中に生き続けているモダンな暮らしのアイデアが、本展には散りばめられています。モダン・ハウスを紐解く7つの視点「衛生」「素材」「窓」「キッチン」「調度」「メディア」「ランドスケープ」をヒントに、多種多様な住まいの実験を、ぜひひとつひとつ試してみてください。

展覧会構成

本展覧会では、特に力を入れてご紹介する傑作 14 邸を中心に、20 世紀の建築家たちの挑戦を以下の 7 つの観点に着目してご紹介します。

衛生：清潔さという文化

HYGIENE: creating a culture of cleanliness

2020 年に始まった新型コロナウイルス感染症の流行からも分かるように、古来、感染症の克服は、人類が生き延びるための重要な課題のひとつです。急速に都市化が進み、人々が密集して暮らすようになった 19 世紀のヨーロッパでは、感染症から身を守るため、公衆衛生に対する関心が深まりました。そして、病原体を特定し、適切に処方されるようになった医学の進歩にともなって、住まいも科学的に見直されるようになりました。本展覧会でご紹介するモダン・ハウスの浴室や洗面には、清潔さや健康といった近代における衛生と身体への眼差しがあらわれています。

素材：機能の発見

MATERIALITY: discovering physical functions

20 世紀の初頭、鉄やコンクリートによる新たな構造法が広まり、住まいの建設に用いられるようになりました。ガラスの大量生産も可能になり、住まいはそれまでの重々しい素材から解放されていきます。時代の変化に刺激を受けた建築家たちは、鉄やガラスのみならず、木材やタイル、テキスタイルといった伝統的な素材にも、新しい住まいの快適さを生み出す可能性を探究しました。本展覧会では、モダン・ハウスにおける新たな素材の使われ方を紹介します。

窓：内と外をつなぐ

WINDOW: framing indoor / outdoor living

鉄やコンクリートによる新たな構造法の導入によって、大きく変容したのが窓でした。ヨーロッパのかつての石造りの建物では、開口部の大きさに限りがありました。しかし、強度を増した建物には大きなガラス窓を設置することができ、そこから日光や風を得るだけでなく、窓を閉めても眺望を楽しむことができました。このことは、それまでの屋内と屋外の境界に対する考え方を本質的に変え、窓を通じて、内と外が浸透するようになったのです。本展覧会で取り上げるモダン・ハウスの個性的な窓をとおして、内と外をつなぐ豊かな演出をみる事ができるでしょう。

キッチン：現代のかまど

KITCHEN: modernizing the hearth

工業が発展した 19 世紀には、労働の効率が重視されるようになりました。こうした考えは住まいにも入り込み、キッチンに反映されていきます。1926 年にドイツのフランクフルトの集合住宅のために設計されたフランクフルト・キッチンは、少ない動作で効率よく調理や配膳ができるように工夫された、いわゆるシステム・キッチンの先駆けでした。炊事場は、ヨーロッパでは地下、日本では土間など、住まいの裏に置かれました。しかし、核家族が主流になるにつれて、それは食堂や居間に近い、家族が集う明るく中心的な空間に組み入れられるようになったのです。そこには、女性の多様な生き方も反映されています。モダン・ハウスのキッチンには、家事をとりまく社会的な考え方の変容が映しとられています。

調度：心地よさの創造

FURNISHINGS: creating comfortable living

19 世紀のヨーロッパでは、過去の様式を脈絡なく模倣し、質的にも粗悪な量産品が巷にあふれたことへの反省から、さまざまなデザイン運動が生まれました。20 世紀にこれを引き継ぎ、後の世に大きな影響を与えたのが、1919 年にドイツのヴァイマルに開校したバウハウスでした。バウハウスは、織物、金属器、照明や家具など、身の廻りの品々に、機械生産にも適合したシンプルで機能的なデザインをほどこしました。また、調度にも統一感や快適さをもとめた多くの建築家たちは、家具などを自らデザインしました。本展覧会では、人々の美意識までも変えたバウハウスの作品群をはじめとし、20 世紀の人々の暮らしを彩ったさまざまな調度を紹介します。

メディア：暮らしのイメージ

MEDIA: visualizing the dwelling

19 世紀における写真の発明や印刷技術の向上を経て、20 世紀に入ると、マスメディアとしての新聞や雑誌の影響力がますます強くなりました。建築家やデザイナーもこれを強く意識し、ル・コルビュジエや藤井厚二などは、自らの考えを活字やイメージで世に広めようとしてしました。また、1927 年にドイツ工作連盟が開催した「住居」展など、20 世紀以降、戸建て住宅の普及にともなって住宅の展示も広く行われるようになりました。本展覧会では、人々を魅了する理想的な暮らしのイメージを伝えたメディアとして、書籍や雑誌、住宅展示などを取り上げます。

ランドスケープ：住まいと自然

LANDSCAPE: living in nature

住むための人工的な空間を、地形を含めた自然の環境にどう位置付けるのか。自然との調和をもとめるランドスケープをめぐる課題は、20 世紀のモダン・ハウスにとっても重要な問いとなりました。私たちは、大きなガラス窓を通じて、変化する四季、成長を続ける植生を身近に感じることができます。このことは窓だけでなく、衛生にも密接にかかわります。急速な近代化によって失われた自然とのつながりを住まいに取り戻すことは、心身の健康にもつながるからです。本展覧会では、ランドスケープという観点から、住まいと自然を調和させようという試みについて考察します。

14 邸の鍵となる住宅

ル・コルビュジエ ヴィラ・ル・ラク 1923年

Le Corbusier, Villa «Le Lac », 1923

スイスのレマン湖畔に、ル・コルビュジエが両親のために建てた小さな住宅。ほどなく母ひとりが住むようになった。湖に面した 11m の長い窓が特徴の細長いコンパクトな空間には、来客時のベッドも含めて、必要最小限の設備が機能的におさめられている。

藤井厚二 聴竹居 1928年

Koji Fujii, Chochikukyo, 1928

京都の大山崎町の山林に建つ、藤井の 5 番目の自邸。家族と暮らした「本屋」、趣味を探究した「閑室」、来客を招いた「茶室（下閑室）」からなる。木造モダニズムの傑作と称されるが、日本の気候風土や生活様式を意識した工夫が凝らされている。藤井は、住まいと暮らしに関する自らの先進的な考えを論じた英語の書籍も刊行した。



藤井厚二 聴竹居 1928年 撮影：古川泰造

ミース・ファン・デル・ローエ トゥーゲントハット邸 1930年

Mies van der Rohe, Tugendhat House, 1930

チェコ共和国のブルノ市にある、繊維業で成功したトゥーゲントハット夫妻の邸宅。通りから見ると平屋のようだが、高台の地形を生かした 3 階建ての建物である。内部には、ミースがデザインした家具が置かれた。鉄の独立柱で支えられた空間は、カーテンや縞瑠璃の間仕切りなどで、機能的に緩やかに区切られている。

ピエール・シャロー メゾン・ド・ヴェール 1932年

Pierre Chareau, Maison de Verre, 1932

パリの婦人科医のクリニック兼住居として設計された。別の居住者がいた 3 階建ての建物の最上階を鉄骨で支えつつ、下 2 層を解体して 3 フロアが新設された。ガラスブロックのファサードで覆われた内部は、グリッド状に仕切られ、窓や棚、扉などには、機械仕掛けのさまざまな可動システムが導入されている。



ピエール・シャロー メゾン・ド・ヴェール 1932年 撮影：新建築社写真部

土浦亀城 土浦亀城邸 1935年

Kameki Tsuchiura, Tsuchiura Kameki House, 1935

土浦夫妻によるふたつ目の自邸。東京の上大崎に建てられた木造乾式構造の建物は、様式、設備ともに欧米の最新の動向を取り入れつつ、日本の風土にも適合するよう設計された。内部は、敷地の高低差を生かした5つのフロアでゆるやかに繋がられている。信子は、家事労働の軽減を意図して台所を機能的に設計している。

リナ・ボ・バルディ カサ・デ・ヴィドロ 1951年

Lina Bo Bardi, Casa de Vidro, 1951

イタリア出身のボ・バルディが、ブラジル国籍を得た1951年にサンパウロに建てた自邸。高台のガラスファサードで覆われた建物の周囲には、建築家自身が吟味して植物を植えた。植物や土着の文化に関心が高いボ・バルディは、その開放的な室内を、地元の木材を使って自ら制作した家具や、アートディーラーの夫とともに集めた美術品や民芸品で満たした。



リナ・ボ・バルディ カサ・デ・ヴィドロ 1951年

広瀬鎌二 SH-1 1953年

Kenji Hirose, SH-1, 1953

本住宅は、広瀬がSH-72まで手がけた鉄骨造りの「SHシリーズ」の記念すべき第一作。1953年に鎌倉材木座に建てられたこの自邸は、極限まで細くした鉄骨のほか、ガラス、レンガ、コンクリートなどの工業製品を材料とした、きわめて実験的な住宅だった。

アルヴァ・アアルト ムーラツァロの実験住宅 1954年

Alvar Aalto, Murtala Experimental House, 1954

フィンランドのパイエンネ湖にある小さな島、ムーラツァロ島に建てられた、夏を過ごすための自邸。入江から伸びた小道の先のレンガやタイルで覆われた中庭のある本住宅は、敷地内のサウナ小屋や船着場とともにデザインされた。自然との調和や共生を目指したアアルトの思想がよく伝ってくる。

ジャン・プルーヴェ ナンシーの家 1954年

Jean Prouve, Jean Prouve's House in Nancy, 1954

エンジニアだったプルーヴェが、自身が経営していた工場の部材をもちいて組み建てた自邸。構想段階からの変更を余儀なくされながら、プルーヴェ自身が設計、施工までも手がけた。傾斜地に最小限の平地を整え、ありあわせの部材を組み合わせて造られた細長い建物には、ナンシーの街を見渡すさまざまなタイプの窓が設置されている。

エーロ・サーリネン、アレクサンダー・ジラード、ダン・カイリー ミラー邸 1957年

Eero Saarinen, Alexander Girard, Dan Kiley, Miller House, 1957

アメリカの実業家、ミラー夫妻の依頼により、インディアナ州コロンバスにサーリネンが設計した豪華な邸宅。内装にはジラードも参加し、造園家のカイリーが庭園を担当した。見事な調度とランドスケープを取り込んだ広大な庭を含め、きわめて豪華な邸宅である。



エーロ・サーリネン、アレクサンダー・ジラード、ダン・カイリー ミラー邸 1957年

菊竹清訓、菊竹紀枝 スカイハウス 1958年

Kiyonori and Norie Kikutake, Sky House, 1958

都市や建築も有機的に成長するとする建築運動「メタボリズム（新陳代謝）」を代表する菊竹の自邸。コンクリートの柱で持ち上げられた 10×10mの居住空間の周囲に、「ムーブネット」と呼ばれる台所や浴室が、交換可能なものとして設置された。後に、カプセル状の子ども部屋のムーブネットも居住空間から 1 階のピロティに吊り下げられた。

ピエール・コーニッグ ケース・スタディ・ハウス#22 1960年

Pierre Koenig, Case Study House #22, 1960

アメリカの建築雑誌『アーツ・アンド・アーキテクチャ』が企画した実験住宅プログラム「ケース・スタディ・ハウス」のひとつで、スタール邸とも呼ばれる。ロサンゼルスを一望する天井までのガラス壁で囲まれた建物は、映画や雑誌など数々のメディアに登場した。開放的なアイランド型キッチンが設置されている。

ルイス・カーン フィッシャー邸 1967年

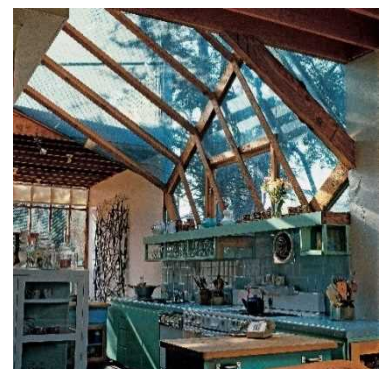
Louis Kahn, Fisher House, 1967

アメリカのフィラデルフィア郊外の自然豊かな場所に建つ。キューブ状のふたつの建物を、片方 45 度ずらして接続している。暖炉の脇にあるリビングの窓辺には、美しい景観を切り取るガラス窓や風を取り込む開閉窓、人が佇めるベンチなど、さまざまな用途が組み合わされている。

フランク・ゲーリー フランク&ベルタ・ゲーリー邸 1978年

Frank Gehry, Frank & Berta Gehry House, 1978

アメリカのカリフォルニア州の、ありふれた建売の住宅を独自に拡張した自邸。使われている建材もまた、波型鉄板やチェーンリンクフェンス、既成の木材など、規格化された量産品である。ゲーリーは、既存の建物を大胆に再構築した本住宅によって、一躍その名を国際的に知られるようになった。



フランク・ゲーリー フランク&ベルタ・ゲーリー邸 1978年

© Frank O. Gehry. Getty Research Institute, Los Angeles (2017.M.66)

関連イベント

記念講演会「リビング・モダニティ：過去から現在、そして未来へ」

出演 | ケン・タダシ・オオシマ
(ワシントン大学教授／本展ゲスト・キュレーター)
日時 | 9月20日(土) 14:00-15:30 (開場13:30-)
会場 | KOBELCO ミュージアムホール
定員 | 150 名

※英語、日本語通訳あり

※先着順、要観覧券、「芸術の館友の会」会員優先座席あり

HART TALK 館長といっしょ! Vol.19

藤井厚二の眼差しもうひとつのモダニズムー「聴竹居」

出演 | 松隈章 (一般社団法人聴竹居倶楽部代表理事)
日時 | 10月25日(土) 14:00-15:30 (開場13:30-)
会場 | KOBELCO ミュージアムホール
定員 | 150 名

※先着順、要観覧券

学芸員による解説会

日時 | 10月11日(土)、11月15日(土)、12月13日(土)
いずれも15:00-15:45 (開場14:30-)

会場 | レクチャールーム

定員 | 80 名

※先着順

ゆっくり解説会 in Autumn

展覧会の見どころを手話通訳および要約筆記付きでゆっくりとしたペースで解説します

日時 | 10月12日(日) 13:30-14:25

会場 | レクチャールーム

定員 | 60 名

※先着順

こどものイベント

日時 | 10月19日(日)

※詳細は決まり次第、当館ホームページでお知らせします。
問合せ：tel. 078-262-0908

ミュージアム・ボランティアによる スライド解説会

日時 | 毎週日曜日11:00- (約15分)

会場 | レクチャールーム

定員 | 80 名

※先着順

※その他のイベントは展覧会公式サイトをご覧ください。

同時期開催の展覧会

2025 コレクション展 I

ベスト・オブ・ベスト 2025

4月24日(木) - 12月14日(日)

特集 | 中山岩太

中山岩太 I 4月24日(木) - 7月13日(日)

中山岩太 II 7月18日(金) - 9月28日(日)

中山岩太 III 10月3日(金) - 12月14日(日)

小企画 | 美術の中のかたち一手で見る造形

中谷ミチコ 影、魚をねかしつける

9月5日(金) - 12月14日(日)

横尾忠則現代美術館での

同時期開催の展覧会

復活! 横尾忠則の髑髏まつり

9月13日(土) - 12月28日(日)

Ando Gallery

当館 2F / 入場無料 (月曜休室)

「住吉の長屋」(1976年)や「小篠邸」(1981・84年)をはじめとする安藤忠雄の初期の代表的な住宅建築から、現在進行中の最新プロジェクトまでを展示しています。安藤忠雄建築研究所による図面やドローイング、模型の数々を、ぜひ本展とあわせてお楽しみください。

開催概要

展覧会名 特別展「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」
LIVING Modernity: Experiments in the Exceptional and Everyday 1920s-1970s

会 期 2025年9月20日(土) - 2026年1月4日(日)

開館時間 10:00 - 18:00 ※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日[ただし、10月13日(月・祝)、11月3日(月・祝)、11月24日(月・振休)は開館、10月14日(火)、11月4日(火)、11月25日(火)、12月31日(水)、1月1日(木)は休館]

会 場 兵庫県立美術館 企画展示室

主 催 兵庫県立美術館、日本経済新聞社

後 援 一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本建築家協会

協 賛 公益財団法人伊藤文化財団

協 力 ミサワホーム株式会社、株式会社 竹中工務店、株式会社新建築社

特別協力 公益財団法人日本教育公務員弘済会 兵庫支部

監修 | 岸和郎（建築家、京都大学名誉教授、京都工芸繊維大学名誉教授）

ゲスト・キュレーター | ケン・タダシ・オオシマ（ワシントン大学教授）

アソシエイト・キュレーター | 佐々木啓（建築家）

会場構成協力 | 長田直之（建築家、ICU一級建築士事務所主宰、奈良女子大学工学部教授）

アート・ディレクション | 田中義久（グラフィックデザイナー・美術家、デザイン会社centre Inc.主宰）

観覧料

	当日券	団体料金	前売券(9/19まで)
一般	1,800円	1,600円	1,600円
大学生	1,000円	800円	800円
高校生以下	無料	—	—
70歳以上	900円	800円	—
障害者手帳等をお持ちの方（一般）	450円	400円	—
障害者手帳等をお持ちの方（大学生）	250円	200円	—

- ・前売販売期間：7月9日（水） - 9月19日（金）（会期中は販売しません）
- ・一般以外の料金でご利用される方は証明書を観覧当日ご提示ください
- ・障害者手帳等をお持ちの方1名につき、介助者1名無料
- ・団体鑑賞（20名以上）でご鑑賞いただく場合は1ヶ月前までにご連絡ください
- ・コレクション展は別途観覧料が必要です（本展とあわせて観覧される場合は割引があります）

[主なチケット販売場所] ローソンチケット（Lコード：51745）、チケットぴあ（Pコード：687-297）、セブンチケット（セブンコード：111-696）、イープラス、CN プレイガイド、アソビュー！、兵庫県立美術館ミュージアムショップ（一般のみ）

交通案内

- ・阪神岩屋駅（兵庫県立美術館前）から徒歩約8分
- ・JR神戸線灘駅南口から徒歩約10分
- ・阪急王子公園駅西口から徒歩約20分
- ・JR三ノ宮駅から神戸市バス（29、101系統）にて約15分、「県立美術館前」下車すぐ
- ・地下駐車場（乗用車80台収容・有料）

※ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください。



「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 広報画像ダウンロードのご案内

本展では、オンラインでご利用いただける、広報用ダウンロードシステムをご用意しております。本リリースに掲載している画像のうち以下の図版については、下記の URL にアクセスしていただきお申込みください。（※初回のみご登録が必要です。）

https://www.artpr.jp/hyogo_pref_museum_of_art/lm



藤井厚二 聴竹居 1928年 撮影：古川泰造



ピエール・シャロー メゾン・ド・ヴェール 1932年 撮影：新建築社写真部



リナ・ボ・バルディ カサ・デ・ヴィドロ 1951年



フランク・ゲーリー フランク&ベルタ・ゲーリー邸 1978年
©Frank O. Gehry. Getty Research Institute, Los Angeles (2017.M.66)



マルセル・ブロイヤー 《サイドチェア B32》 1928年
ミサワホーム株式会社 撮影：立木圭之介



(チラシ) ※キャプション不要

【 画像使用に際しての注意事項 】

- 「作家名」「作品名」「制作年」「展覧会名」「所蔵先」「クレジット」などを明記してください。
- 作品画像の加工（着色、トリミング、文字載せなど）はできません。
- 基本情報、画像使用の確認のため、ゲラ・原稿の段階で「広報・営業担当」までお送りくださいますようお願いいたします。
- 掲載媒体を1~2部、もしくはURL、同録（DVD、CD）を「広報・営業担当」宛にお送りください。
- 画像使用は本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。

取材申込書

取材をご希望の方は下記にご記入のうえ、
取材希望日の**3営業日前まで**にメールまたはFAXにてお申し込みください。

メール： press@artm.pref.hyogo.jp

FAX： 078-262-0903

お申込日 年 月 日

<< 取材内容 >>

希望日時	第1希望	年	月	日	(曜)	時	分	～	時	分
	第2希望	年	月	日	(曜)	時	分	～	時	分
	第3希望	年	月	日	(曜)	時	分	～	時	分
希望場所										
企画内容										
カメラ撮影	☐ あり (スチール 台 ムービー 台 三脚・脚立 台)									
	☐ なし									
取材人数	人									
取材時の代表者名										
媒体種別	☐ テレビ ☐ ラジオ ☐ 新聞 ☐ Web ☐ その他 ()									
媒体名										
掲載・放送予定日時	☐ 掲載	年	月	日	(曜)	時	分			
	☐ 放送	年	月	日	(曜)	時	分			

ご連絡先	担当者名	
	社名・部署名	
	住所	
	電話番号	
	FAX	
	E-Mail	

記者説明会のご案内

9月19日(金) 13:00(受付12:30～)より記者説明会を開催いたします。ご参加頂けます場合は、下記よりお申し込みください。

< 記者説明会お申込みはこちら >

https://www.artpr.jp/hyogo_pref_museum_of_art/lm

お申込み締切：9月17日(水) 17:00 (※初回のみご登録が必要です。)

<取材についてのお問い合わせ>

兵庫県立美術館 広報・営業担当(岩本・高村・成松)

〒651-0073兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL：078-262-0905 FAX：078-262-0903 Mail：press@artm.pref.hyogo.jp